

現地ドイツの新聞評①（日本語訳）

ギーゼナー・アンツァイガー紙（Gießener Anzeiger）2013年6月26日(水)

ヴォイツェクと原発事故 清流劇場—ティル劇場、日本人に向けたスタンディング・オベーション

（ギーゼン）月曜の夜、23時半ごろ、満席のティル劇場。日本から来た清流劇場の『WOYZECK version FUKUSHIMA』公演がエンディングを迎えたとき、観客はきわめて大きな驚きに包まれた。俳優たちが一斉に口ずさみはじめたのだ——「誕生日おめでとう、ビューヒナー」。しかも、なんとドイツ語で。観客はこれに、何分間にもわたるスタンディング・オベーションでこたえた。

これはビューヒナー国際演劇祭において、とりわけ特別な瞬間のひとつであり、この日本の劇団は、田中孝弥演出によるスリリングな『ヴォイツェク』により、フェスティバルをより良いものにした。成功のカギは、誠実だが最後には殺人を犯してしまうヴォイツェクの物語を、福島原発事故に絡めて描いたことである。

田中は、裁判にかけられた主人公ヴォイツェクが、人生の様々なエピソードをフラッシュバックするという筋書きを、ガイガー・カウンターの刻むリズムを通して構成した。その脅かされるような不穏な雰囲気は、ゆらめく大きな白いビニールで覆われた舞台美術（仲里良）からも醸し出されていた。ビニールによって仕切られた空間は、全て白色で統一された簡素な小道具ともあいまって、人間をよせつけない冷たさを感じさせる。ガイガー・カウンターの拍子と、ヴォイツェクに「強制避難区域」などのキーワードが書かれた紙を身体中に貼り付け、対象化するというアイデアが結びつき、ヴォイツェクがそれらの対象とマリーへの愛の間で絶え間なく揺れ動く、人間不在の脅迫的なシナリオとなっている。

また、仙波宏文によるピアノの音楽や、俳優たちの巧みな演技も、凍えるような緊張感をさらにかき立てた。特に、防護服に身を包んだアンディ岸本の、完全に根こそぎにされた主人公、最終的に破滅する善人像は、きわめて真に迫っていた。彼は頭を垂れ、イシダトウショウ・や乃えいじ・八田麻住・上瀧昇一郎が厳粛に演じる4人の裁判官たちの前に座る。最終場面で彼らは、原発で処理作業に従事していたヴォイツェクに、殺人の有罪判決を下し、それによって、良き人間性が完全に破壊された世界に、痛烈な疑問を投げかける。世界に通じる現代性をビューヒナーとその作品から見事に引き出し、細部に気を配って観客を魅了する、緻密な演出だった。

今夜、第2回目の上演が行なわれる。

原発のフランツ

『WOYZECK version FUKUSHIMA』 清流劇場@ティル劇場—ビューヒナー生誕を祝って

月曜深夜、ビューヒナー国際演劇祭に早くも2つ目の『ヴォイツェク』が登場した。日本から招聘された清流劇場が、原発事故以後に制作された『WOYZECK version FUKUSHIMA』を、ティル劇場で上演したのだ。人々を驚愕させたのは、2011年3月、自然災害が福島原発を襲い、大量の放射線が飛散したことだけではない。とりわけ原発会社の情報統制に対しては、規律正しい日本でさえも、路上で反原発デモが行なわれた。

演出家・劇作家の田中孝弥は、社会問題やマイノリティへの差別問題を扱った作品を多く手掛けている。1996年に旗揚げした劇団・清流劇場は、オリジナル作品ですでに19回の公演を行い、2004年～2005年には、文化庁・新進芸術家在外派遣研修員としてベルリンのグリプス劇場に留学した。

それゆえ彼はドイツ語を話し、公演後、ギーゼン劇場への謝辞を述べて観客を驚かせた。加えてこの劇団は、自らビューヒナーの誕生日ソングをドイツ語で創作していた。それは、リベラルな生き方や、ビューヒナーの不朽の名作を称える賛歌であった。もし彼らの『ヴォイツェク』の解釈が観客の胸を打っていないとしても、これが率直なステートメントになるのである。

『WOYZECK version FUKUSHIMA』においては、フランツ・ヴォイツェクは白い防護服に実を包んだ原発作業員であり、厳格な裁判官たちが彼とともに重要なシーンを回想するという枠構造になっている。簡素な道具を用い、ピアノの演奏や、ビニールで覆われた舞台美術、紙でできた小道具で、場の雰囲気演出していた。例えばマリーが「赤ん坊」と書かれた紙をあやしたり、ヴォイツェクが「猫」と書かれた紙をつかまえる、といった具合である。

『ヴォイツェク』の現代化の巧みさには、目を見張った。例えばヴォイツェクは、医者からの指示にしたがい、甲状腺ガンを予防する為にイソジンでうがいをする。そして原作のエンドウ豆のかわりに、柿の種（「種」は「核」と同じ語）を食べる。ヴォイツェクの見る幻覚が、実際の原発事故の脅威（「光の筋による眩しさ」、「突然の静寂」）によるものであるという演出は、特に効果的だった。そしてマリーは、ヴォイツェクの体が汚染されているとあって、手を触れることも拒む。

ブレヒトの異化効果を取り入れ、また「ささやき声」で演じられるコーラスには、古代演劇の趣も感じさせる演出であった。ドイツ語の翻案テキストが背後のスクリーンに投影されるものの、5人の俳優のきわめて集中的な演技は、字幕を必要としないほどだった。

(Dagmar Klein)